

## 神さまの約束

[聖書]出エジプト記 34章 4～10節

モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及び慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者。」モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、言った。「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中にあって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」主は言われた。「見よ、わたしは契約を結ぶ。わたしはあなたの民すべての前で驚くべき業を行う。それは全地のいかなる民にもいまだかつてなされたことのない業である。あなたと共にいるこの民は皆、主の業を見るであろう。わたしがあなたと共にあって行うことは恐るべきものである。

### [序] 言葉で結ばれる

聖書の信仰の特色は、神さまと私たち人間とが、儀式や行事、あるいは占いとか易とか霊媒などによらず、神さまが語りかける言葉によって結ばれていると信じるところにあります。神さまは、特別に選んだ預言者を通してみ言葉を語り聞かせてこられました。新約聖書はこう証しています。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(ヘブライ1:1～2)。「実に信仰は聞くことによる」(ローマ10:17)。ですから聖書の信仰で何よりも大事なものは、神が語られるみ言葉と、それを聞くことなのです。

今から3300年ほど前には、イスラエルの民はエジプトの奴隷にされていました。彼らをアブラハムに約束されたカナンの地に脱出させた出エジプトという歴史的な出来事——これはモーセが選ばれ、神さまの言葉を取り次ぎ、民が聞き従うことによって実現されたのです。モーセも神さまの姿を見ていません。しかし語りかけられる言葉をしっかりと聞き取ることが出来ました。そしてイスラエルの人々は、モーセの語る言葉を神さまの語りかけとして聞き、応答していきました。神さまはこのイスラエルの民を通して、み言葉に聞き従うならば、どんなに豊かな命を生きることが出来るかを世界に証しようとしたのでした。

### [1] 金の子牛を造った罪

神さまは、神の民の生き方の指針を、明確に石の板に書き記してモーセにお渡しになりました。これが十戒といわれるものです。ところがこの十戒をいただくにあたってモーセは40日間もシナイ山の上で過したので、その間にイスラエルの民は不安になり始めました。「あの偉大な指導者モーセが行方不明になってしまった。これからどうしようか」。民全員が金の耳輪をはずして若い雄牛の銅像を造って、これを先頭に担いで、旅を続けることにしたのでした。見える形で先頭を進む神さま

が欲しくなったのです。

どうして彼らは、モーセに代わって神さまの言葉を取り次いでくれる預言者を与えて下さいと、心を合わせて祈らなかったのでしょうか。預言者を通して言葉を聞くだけでは何とも心もとなくなってきたのです。神さまが自分たちの間に居て下さるということが、一目見れば分かる形で現されれば、安心出来ると思うようになってきたのです。しかしこの変化を神さまは、激しく怒りました。「わたしは、彼らを滅ぼし尽くし、モーセを大いなる民とする」(32:10)。

モーセを通して語りかける神さまは、お姿を見ることが出来ません。心の耳を澄ませてみ言葉を聞き取り、たとえそれが自分の願いと違っても、決断して服従していく。これはしんどいことです。一方、金の子牛を担いで進む場合は、神さまが自分たちと一緒にいて下さることが、誰の目にも明らかです。見るだけで安心出来ます。しかし安易な道には、必ず落とし穴があります。楽な道は危険なのです。

金の子牛はものを言いません。畑のかかしと同じです(エレミヤ 10:5)。ですから担ぎ手が次第にしゃべり始めます。聞き従うよりも、ああしましょう、こうしましょうと、金の子牛を自分たちの都合の良いように動かすようになってしまいます。神さまとの関係が転倒して、人間が主になり、神が僕になっていきます。罪深い人間が神さまを召使にして、我欲を満たそうとしたら、自滅します。ですから神さまは断固として、NO！とおっしゃったのでした。

モーセは必死になって懇願しました。「あの神は荒野で民を滅ぼすためにエジプトから導き出したと、世の人々は言うでしょう。神さま、貴方の名誉が汚されます。貴方の真実にかけて、アブラハムたちへの約束をお守り下さい。」「金の神を造った彼らの罪をお赦しいただけなければ、私の名を貴方の書から消し去って下さい」。モーセのこの態度を見て、民も自分たちの罪をようやく自覚するようになり、装身具を取り外して喪に服しました。そこで神さまは彼らを赦し、もう一度十戒の石の板を与え直すためにモーセを山上にお呼びになったのでした。

## [2] 憐れみと裁きの順序

神さまは雲の中からご自分の御名を宣言なさいました。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者」。

モーセが神さまから召し出された時、彼はエジプトの王宮から逃げ出して、ミディアンで羊飼いをしていました。その彼を呼び出して、エジプト国王と交渉させようとなさった時、モーセは繰り返し尻ごみしました。その時神さまは、ご自分の新しい呼び名をモーセにお示しになったのです。「わたしは主である。わたしはアブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった」(6:2～3)。

主——これは主権と支配と権威を現す言葉です。モーセもエジプト国王も僕です。へりくだって絶対的に服従すべき僕に過ぎません。僕に求められていることは、服従と忠実です。主の命令をそのまま実行すれば、主が僕を使って、大いなる業をなさるのです。神さまは新しい呼び名で、ご自分とモーセの関係をお示しになったのです。これは神さまに対するモーセの信仰が新しくされたことを意味します。更に言えば、モーセを通してイスラエルの民の神さまに対する信仰も、新しい展開をみせたと言えましょう。

神さまは、主としての絶対的な主権・権威・権能をもってエジプト王を打ち据え、イスラエルの民を救い出して下さいました。そして神の民としての新しい生活指針として十戒をお与えになろうとしました。最初に与えられた十戒では、第二戒「いかなる像も造ってはならない」の後に、「わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代まで問うが、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える」との言葉が付け加えられていました。

ところで民は、モーセがその戒めを持って山から下りてくる前に、金の子牛を造って担ぎまわろうとする大変な罪を犯してしまったのです。民の信仰の現実には神さまの期待より遥かに劣るレベルです。そこでモーセをもう一度山頂に呼び出して、十戒を与え直すに当って、神さまは言葉の順序を変えてしまわれたのでした。

「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。しかし罰すべき者を罰せずにはおかず、父祖の罪を、子、孫に三代、四代までも問う者」。罪を問う前に、罪と背きと過ちを幾千代にもわたって赦すと、主なる神さまの忍耐強い憐れみと慈しみの豊かさが宣言されています。

神さまは、甘やかし一方の神さまではありません。罰すべき者を罰せずにはおかない厳しいお方なのです。その点は変わっていません。父祖の罪を三代、四代までも問うとおっしゃっています。神さまを侮ってはなりません。深く恐れなければなりません。私たちの罪は自分一代では終わらず、その悪影響は3代4代にまで及ぶとは、何という恐ろしいことでしょうか。罪を軽々しく犯すことはできません。悪と真剣に戦い、正しく生きようと必死にならなければなりません。

しかし神さまは、戒めを受け取る前に背いてしまったご自分の民の現実を見て、裁きを包む深い赦しの憐れみを前面にお示しになりました。神さまは、罪を厳しく裁きつつ、なおはるかに憐れみ深く恵みに富む赦しの神さまなのです。

### [3] 戒めを守れない私たち

それにしましても、この赦しのお言葉に、おやっと思いいになりませんか。幾千代にも及ぶ慈しみをもち続けて罪と背きと過ちを赦すと、神さまはおっしゃっているのです。私たちの罪深さは、幾千代にも及ぶ神さまの赦しの慈しみを必要としていると、言われているのです。

そうです。150万を越すイスラエルの民の大集団は、神さまの驚くべきみ業によって、何とかカナンの地に戻ることができました。しかし旧約聖書に記されているカナンの地での彼らの 3300年の歴史は、罪を犯しては裁きを受け、悔い改めては赦しをいただくの繰り返しでした。そしてその歴史は、今日に至るも私たちの間で繰り返されているのです。十戒を与えられても、守れずに罪を繰り返す私たち。では神さまはどうして十戒をお与えになったのでしょうか。

マルチン・ルターが宗教改革を始めて46年後の1563年に、ドイツのハイデルベルクで改革派の信仰を簡潔にまとめて信仰問答書が生まれました。これが今でもプロテスタントの諸教会でよく学ばれているハイデルベルク信仰問答ですが、そこでは十戒の学びがこのような問答で締めくくられています。概略を紹介しましょう。

問114 このような戒めを完全に守ることができるのですか。

答 いいえ。最も聖なる人々でさえ、わずかばかり従い始めたに過ぎません。

問115 誰も守ることが出来ないのに、なぜ神は厳しく私たちに説教をさせるのですか。

答 第一に、私たちが全生涯にわたって、自分の罪深い性質をより深く知り、より熱心に キリストにある罪の赦しと義とを求めるようになるためです。第二に、たゆまずに励み、聖霊の恵みを請い、天上での完成を目指して、次第に新しくされていくためです。

主イエスのもとに金持ちの青年が来て、永遠の命を得るためにはどんな善いことをすればよいでしょうと質問した話が、マタイ、マルコ、ルカの福音書に記されていますね。主イエスは「掟を守りなさい」とおっしゃいました。「子どもの時から皆守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか」。主は慈しんでおっしゃいました。「持ち物を売り払って貧しい人々に施して、私に従いなさい」。彼は悲しみながら立ち去りました。

この青年は、持ち物をみな売って施す隣人愛の実践を求められた時、出来ない自分と直面させられました。自分では十戒をみな守ってきた積りでしたが、守ってはいなかったのです。彼は主イエスから離れて行きました。皆さん、私たちだったらどうしたでしょうか。

「イエスさま、私には持ち物をみな売り払った施すことなど出来ません。憐れんでください。でも永遠の命を頂きたいのです」。慈しみをもってこの青年と向かい合ってくださいているイエスさまです。「それがわかればいいのだよ。そのまま私に従って来なさい」とおっしゃったに違いありません。

## [結]

神さまが望んでおられる掟を守れていると思って自分を誇り、守れない者を批判し、見下す偽善者。神の掟などとても守れない、無理だと決め込んで、神さまを一切無視して生きる無法者。その真ん中に、守れないことを正直に認めながらも、なお懸命に掟を守ろうと励みながら生きていく私たちの生きている道があります。

そして私たちをそのように促しているのが、シナイ山の頂で「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す」と宣言なされた神さまの慈しみです。更に神さまは、イエス・キリストの十字架の死と復活という出来事を通して、幾千代にも及ぶ慈しみと赦しを、私たちに具体的にはっきりとお現してくださいました。私たちは、忍耐強く赦し続けるというお約束に励まされて、み言葉に聞き従おうとし続けるのです。なぜならそこにこそ、豊かな命があるからです。

私たちはあの金持ちの青年と同様に、自分の持ち物を皆与えて主イエスに従うことは出来ません。それでも私に従いなさいとおっしゃってくださる主の赦しと慈しみに促されて、貧しさに悲しみ嘆く人に寄り添って、主のみ足の後をたどって行きたいものです。神さまの憐れみと慈しみの満ち溢れる十字架を見上げながら、み言葉に懸命に聞き従って参りましょう。

完